

受講ノート 2015 From 藤由美の Facebook  
アンドレア師のキリスト教美術史講座  
In 船橋学習センター「ガリラヤ」

2015. 2. 4

今日は午前中、船橋学習センターガリラヤへ行き、アンドレア・レンボ師の「イエスの受難(2)ールカによる福音とイコンの世界」を受講してきました。

初代教会内において福音書が数十年かけて形成される過程についてと、4つの福音書の微妙な違いの意味について丁寧な解説があり、聖書学研究的の真髄に触れられました。

最後に「最後の晚餐」と「三位一体」のイコンについてそれぞれのアイテムに込められた神学的意味をお伺いすることができました。



2015. 2. 18

今日は月2回のアンドレア・レンボ師の講座の日、冷たい雨の中船橋学習センター「ガリラヤ」まで受講に行きました。

「イエスの過越祭の神秘」がテーマで、二千年前のエルサレムの地図と現在のキリスト教各派・ユダヤ教・イスラム教のそれぞれが巡礼に訪れる「聖地」の現状を画像で紹介しながら、歴史的事実として記述された共観福音書の内容に触れられました。

特に最後の晚餐とゲッセマネの園でのイエスの祈りについて、(マルコ・マタイ・ルカの)共観福音書と異なる記述のヨハネ福音書の持つ神学的な理解については、少し難解でしたが新鮮で、アンドレア師の貴重な見解をお聴きすることができました。

東方教会の伝統的イコンの「最後の晚餐」に描かれている内容のそれぞれの意味、そして現代カトリック絵画を代表する Sieger Köder の絵を紹介され、この絵のもつ新しい神学的な意義も解説いただきました。

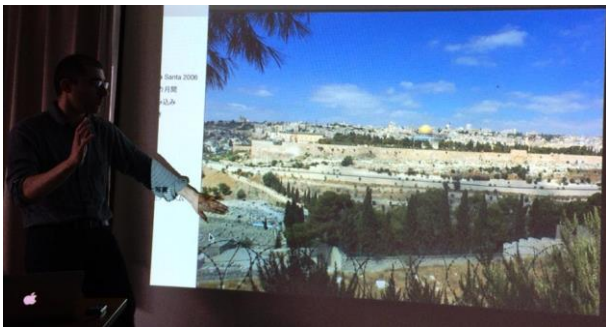
1. エルサレム入城から受難までのイエスの事績の場所の説明、ただし二千年前の地表は、地下10層下にあるとのこと。
2. ゲッセマネから神殿跡（今はイスラム聖地のモスクが建つ）
3. ゲッセマネの教会（東方教会は、別の場所らしい）
4. 「最後の晚餐」のイコンの説明、福音の記述通り、手を伸ばしパンをとるのがユダとのこと。
5. Sieger Köder の「最後の晚餐」の説明（イエスの姿は直接描かれていないが、両手とワイン盃に浮かび上がる面影で表現されている）
6. Sieger Köder の「最後の晚餐」
7. Sieger Köder の「弟子の足をあらうイエス」（「最後の晚餐」と同様、後ろ姿と水盤にうつる影でイエスを表す）

6. と 7. は、下記のブログから拝借しました。  
<http://contemplativecottage.com/.../04/02/art-for-good-friday/>

1.



2.



3.



4.



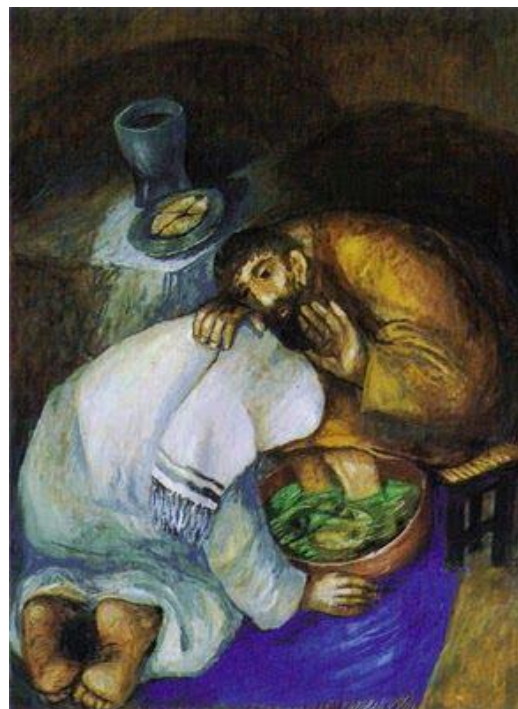
5



6



7





2015. 3. 4

今日は、船橋学習センターでのアンドレア師のルカ伝とイコンの講座を受講。テーマは「イエスの十字架と死」という核心的な内容でした。

そもそも、3世紀までの初代教会は十字架を教会のシンボルにしたり、描いたりすることはなかった、それは十字架磔刑が当時、不名誉で恥辱的な刑と恐れられ、親族であってもその刑場に近寄ることもタブーであったほどだったとのこと。共観福音書は、そのことをリアルに表現しています。

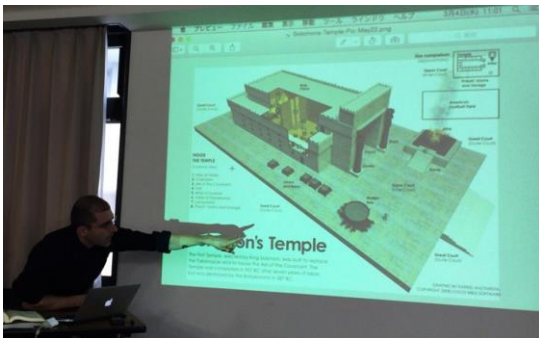
(ルカ 24 : 49 「女たちも、遠い所に立って、これらのことを見ていた。」)

今日の講座では、「聖所の幕が裂けた」について当時の神殿の構造 (No. 1) を示して、「人と神との間の隔てがなくなったこと」を意味すること、同時に磔刑を受けた犯罪者の「あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」という言葉に「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と答えたイエスのいう「パラダイス」の意味は、「人の死とは忘れ去られること」に対しヘブライ語で ZAKAR 「思い出してくれる」という意味であることなど、深い内容に惹きこまれました。

最後のイコンの部では、オルトドックスのイコン (No. 2) に描かれた約束事の解説に続けて、ミケランジェロ 17 才の時の天才的な彫像作品 (No. 3, 4)、サルバドール・ダリの絵画 (No. 5, 6)、シャガールの作品 (No. 7) が紹介され、その時代のもつ信仰と芸術の姿を理解することができました。

(No. 4, 6, 7 はネットで探して借用しました)

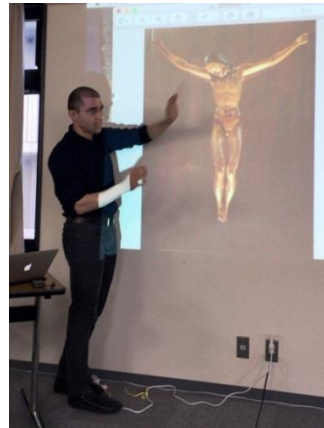
No. 1



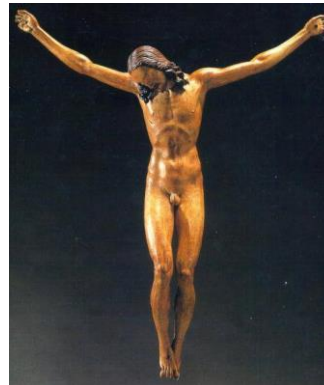
No. 2



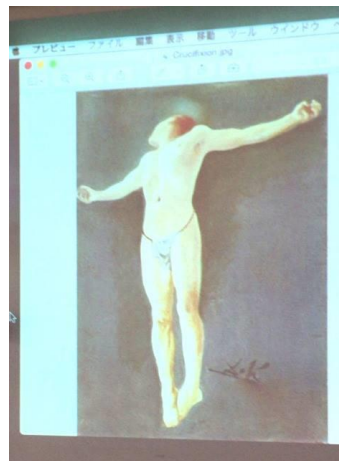
No. 3



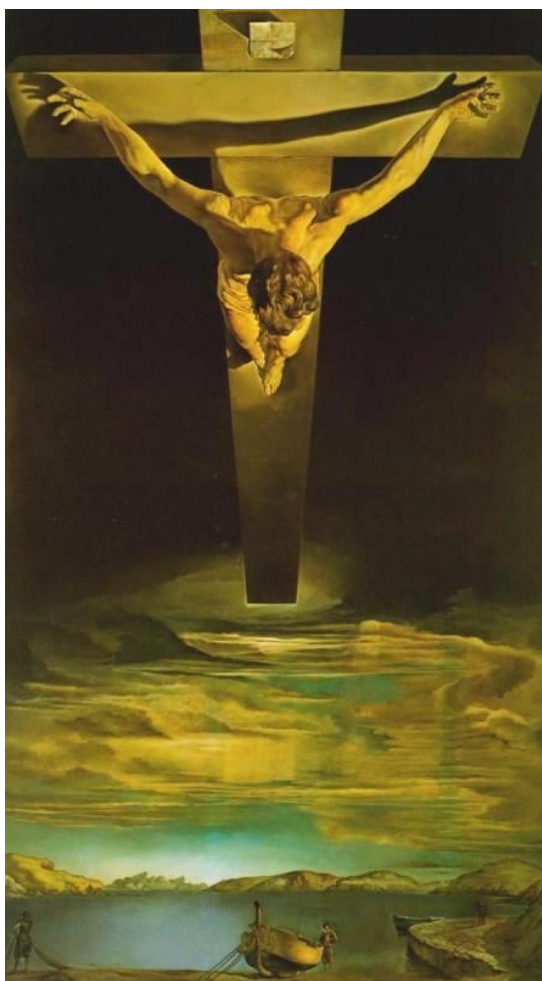
No. 4



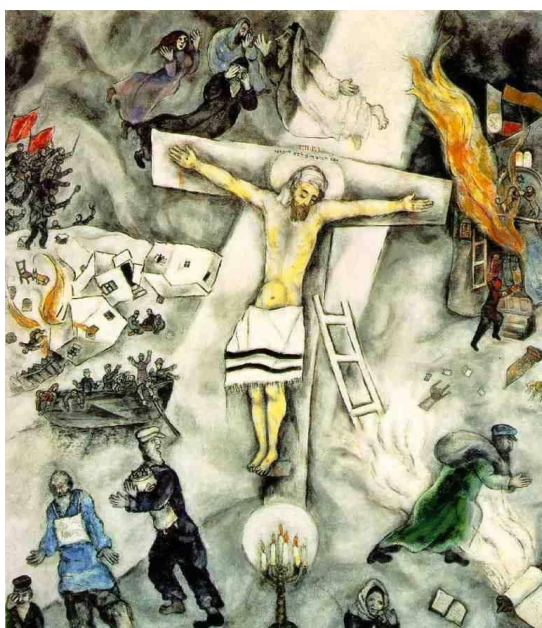
No. 5



No. 6



No. 7



2015. 3. 18

今日 (3/18) は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の福音とイコンについての講座で、今回はイエスの埋葬と復活がテーマでした。

イエスの復活の物語は、ルカやマルコの福音では、静かな埋葬と翌々日の朝、墓に遺体がなくなっているという歴史的な事実を淡々と記し、「女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去った。」(マルコ)と結んでいること。一方、ヨハネの福音は、遺体がなくて混迷するマグダラのマリアに対して『イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。』という箇所、ヨハネの愛についての神学的な理解、即ち「ソロモンの雅歌」が伝えてきたように男女の愛の中で神の愛を理解し、人間の愛こそ「復活」を意味するとのこと。オルトドックスのイコンの説明では、主の埋葬の絵の設定は、(飼い葉桶=棺、包布、洞窟、暗闇と光など) イエスの誕生のイコンに共通すること。

(No. 1)

主の復活の場面に描かれているのは、地獄の門を打ち破り、輝くイエスと、甦るアダムとエワなど (No. 2~3)

復活を描いた現在の絵画では、サルバトーレ・ダリの圧倒的な迫力の作品が紹介されました。(No. 4~5、天上の神は女性の顔で描かれている)

今回で昨秋からのアンドレア師の講座は終了、毎回感動的な講義でした。

(No. 3 と No. 4 はネットから探しました)



No. 1





No. 2

No. 3



117 聖フランシスコの聖堂、アッシジの聖フランシスコの聖堂、アッシジの聖フランシスコの聖堂、アッシジの聖フランシスコの聖堂



No. 4

No. 5



2015. 5. 20

今日 (5/20) から、船橋学習センターガリラヤでのアンドレア・レンボ 師の『「神の国の到来」ーシステーナ礼拝堂の想像力』の講座が始まり、受講してきました。

今回は、本題のシステーナ礼拝堂天井画のテーマに入る前の予備知識で、まずは旧約聖書の成立史とその研究史について (No. 1)

なお、第二バチカン公会議以前の教会では、このような「批判的な分析研究」はまだタブーだったとか。

二つ目は、ルネッサンスとはどういう変化であったかで、13世紀の画家ジョットの作品を例に説明がありました。アッシジの聖フランシスコ聖堂の絵のように神と人の世界をドラマとして描くジョットの絵は、この後のルネッサンスへの先駆的な役割を果たしましたが、ジョットは同時に、「神の姿」を描くことに徹した形式の中世のイコンも描いて、まさに過渡期の画家でした。(No. 2、No. 3と4はネットから借用)

三つ目は、ミケランジェロの作品の男性美の基盤は、当時発見された古代ローマ時代のラオコーン像であったこと。(No. 5 右はシステーナ礼拝堂の最後の審判、左はラオコーン像)

面白すぎて、あっという間の1時間半の講座でした。

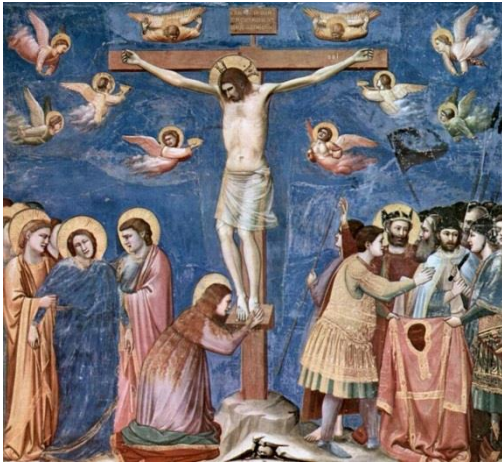
No. 1



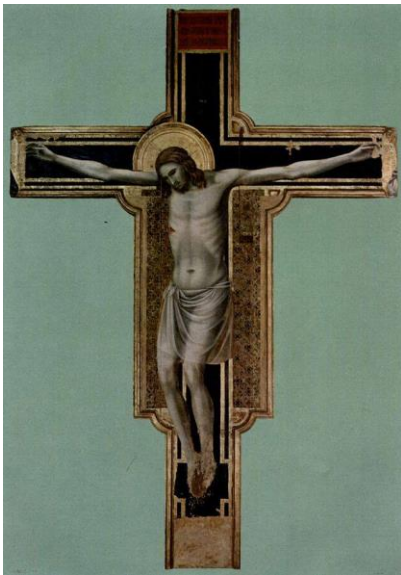


No. 2

No. 3



No. 4



No. 5



2015. 6. 4

今日 (6/3) は、船橋学習センターガリラヤでのアンドレア師の『「神の国の到来」ーシスティーナ礼拝堂の想像力』の講座 2 回目を受講。

前半は、旧約聖書 (のモーセ五書) が 4 種の原資料 J (JAHWIST 資料)・E (ELOHIST 資料)・D (DEUTERONOMIUM 申命記史家)・P (PRIESTERSCHRIFT 祭司資料) で成り立つという「文書仮説」、そしてそのそれぞれの時代背景を「キリスト教史年俵」のプリントで丁寧に解説され、創世記はバビロニア捕囚のころ、バビロニアの神話の影響を受け、また捕囚からの解放を求めて「出エジプト記」を想起して、成立した可能性があるとのことです。

ただし、多神教のバビロニア神話の暴力的な戦闘的な神々は、創世記では一神教のヤハウエ (= 存在する神) が暴力ではなく「ことば」により、まず「光り」を創造する姿として書かれたことは、神の姿の新しい印象であったとのことでした。

後半は、システィーナ礼拝堂 (No. 2) のミケランジェロの描く中央祭壇 (No. 3) のイエスと、天井画 (No. 4) に描かれた神の姿について、びっくりするような神学的な解釈をお聴きました。

特に、「太陽、月、植物の創造」(No. 5 と No. 6) では、太陽や月を創造した後で植物創造に向う神が、お尻と足の裏という後姿で描かれているのには、驚きました。神のお尻は、ミケランジェロの神理解 (= 存在?) を象徴しているのでしょうか?

(No. 3 と No. 6 はネットから拝借しました)

No. 1





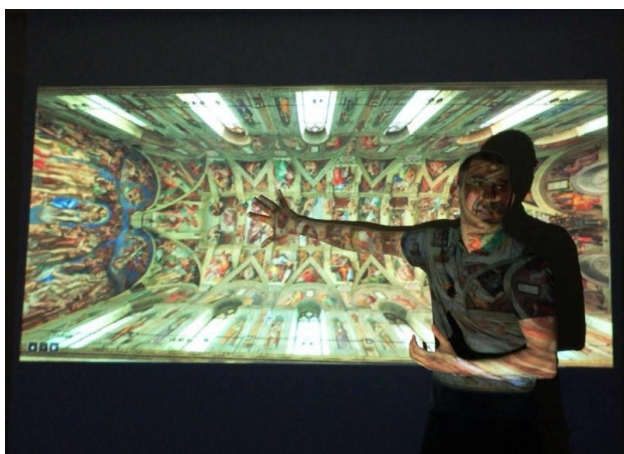
No. 2



No. 3



No. 4



No. 7



2015. 6. 17

今日（6/17）は、船橋学習センター「ガリラヤ」での、アンドレア・レンボ師の講座『「神の国の到来」一の想像力』の3回目を受講。

前回に引き続き、旧約聖書創世記の歴史的な成り立ちとその本質についてと、後半はシステイーナ礼拝堂天井画の意味について、興味津々の内容でした。

歴史的には、B. C12 世紀のエジプト脱出の数世紀後のバビロニア捕囚の中で、バビロニア神話受容により天地創造の宗教が創出され、一神教の創造主の物語として、出エジプト記の前に据えられていくとのこと。旧約の歴史書にバビロン捕囚の史



的叙述はなく、詩編 137 に「バビロンでのシオンの思い出」としてその悲しみと憤りが（「・・・わたしたちは異国の地にあってどうして主の歌がうたえよう。・・・」）歌われていました。

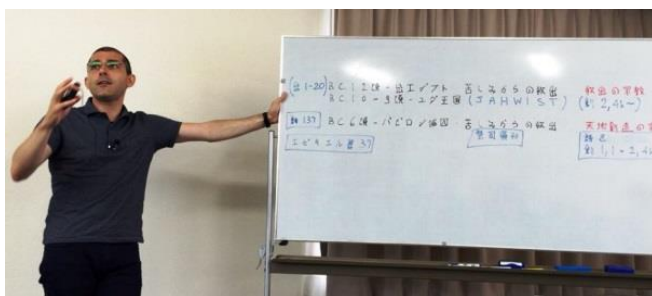
システーナ礼拝堂天井にミケランジェロが描く創造の物語は、9 場面中 3 場面が天地を創造する神、3 場面がアダムとエワの創造で、神と人の関係、3 場面がノアの物語で人の世界。礼拝堂の真ん中は、エワの創造 (No. 6) で、神と男女の理想的な世界を表しているとのこと。

明暗と天地、動植物、そして最後の人間を創造した神は、それらを良しとされ、6 日目に休息する。世界の創造の目的は「休む」ことであつたという結論は、意外でもあり、なるほどと納得できる結論でした。

(No. 2 はシステーナ礼拝堂のピエル・マッテオ・ダメリアによる当初の装飾プラン。青色の天井に金色の星が輝く。

No. 7 のアダムの創造は、Wikipedia の画像を拝借)

No. 1



No. 2



No. 3



No. 4



No. 5



No. 6





No. 7



緑＝聖霊)で、お互い触れ合うばかりの指は、神と人間の関係性を表し、その指の表現は、後世のカラヴァッジョの『聖マタイの召命』のイエスの示す指の形にもとりいれられているとのことでした。

天井画の中心のテーマは、女性の創造。「人」の頭からでも足からでもなく、「人」が眠っている間に肋骨から創造したことは、男女が同等の約割をもつことの象徴だそうです。

(No. 6 と No. 7 はネットからコピーしました)

2015. 7. 1

今日 (7/1) は、船橋学習センター「ガリラヤ」での、アンドレア・レンボ師の講座『「神の国の到来」ーの想像力』の4回目。この講座の日(第一・第三水曜日)は天気が悪く、今日も雨でした。

前半は、ヘブライ語から読み解く創世記の解釈(MIDRASH ミドラッシュ)について。

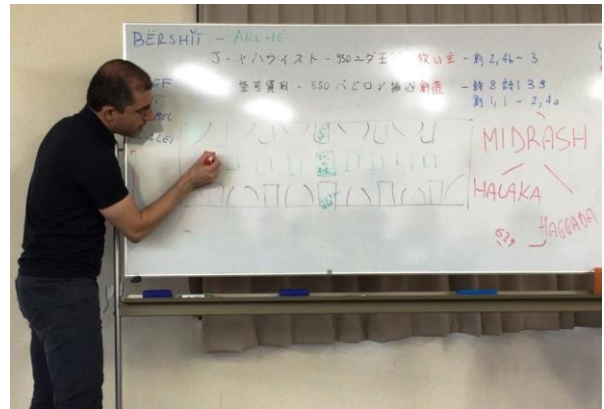
ヘブライ語のアルファベットの alef (アルフ) bet (ベート) gimel (ギーマル) dalet (ダート)・・・の22文字の配列は貴く、詩編の中には一節ごとにこの22文字の語を順に並べる叙述の詩があるほどですが、創世記では最初に来るのは「ベレーシート(初めに)」の語で、アルフではなくベートであるのはなぜかという問題です。

これまでにない難解な講義で、聴き手として消化不良気味ですが、聖書は神の言葉でありながら「人間の言葉」であって人間の立場で語ったもの、「神の本質は関係性」(人間の本質も関係性)であることを表しているからとのこと。(ウ～ン? よくわからない・・・)

後半は、ミケランジェロがユダヤ教の旧約聖書の構造で描いているシステーナ礼拝堂天井画の構造で、こちらは具体的によくわかりました。

有名なアダムの創造の場面の、神の衣の赤色は、イコンの伝統の三位一体の父の衣の色(子=青、

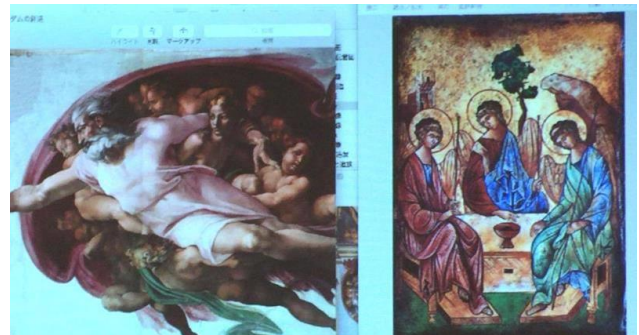
No. 1



No. 2



No. 3



No. 4



No. 5



No. 6



No. 7



2017. 7. 15

今日（7/15）は、船橋学習センター「ガリラヤ」での、アンドレア・レンボ師の講座『「神の国の到来」ーの想像力』の5回目。システーナ礼拝堂天井画の創世記第2章の人間の違反による樂園追放がテーマです。（No. 1）

アンドレア師のお話では、これまでの教会は、アウグスティヌスの古代神学に基づいて、アダムの罪を引き継ぐ原罪と洗礼（幼児洗礼も）による赦しを教義としてきたが、創世記の記述には、「原罪」も「罰」もないとのこと。

本質的に人間は神からつくられた良いものであり、創世記の描く女に課せられた産みの苦しみ、アダムに課せられた地から食物を得る労苦と土にかえることは、人間の現代の実態にほかならない。ヘビの示す「神のように賢くなる」木の実の意味は、誘惑が光と美しさの中にかくれていることであり、また誘惑は、素晴らしい機会でもある。その実をとるか否かを判断するのは人間であり、その結果には責任がともなう。

なお、ヘビは「無原罪の聖母」の画では、女に踏みつけられる姿で描かれる。（No. 4）

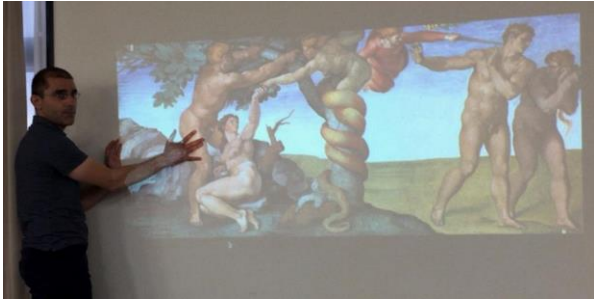
「人は神ではない」とミケランジェロは、アダムの創造の場面で、人は神と少しの距離がある存在に描いている。

祭壇に近い3場面は創造する神の姿、中央の3場面は神と人間の関係、そして入口に近い3場面はノアの物語で、人間そのものの姿を描いている。大洪水の場面は苦難に際して人間同士が助け合う姿である。（No. 2）

今日の講座は創世記の意外な新しい解釈に触れられ、哲学のような手ごたえのある内容でした。また、人間が神のような振る舞いをする事への戒めは、原発や戦争をやめようとする現代への警告のように感じました。

No. 5とNo. 6（ティエポロ「無原罪の御宿り」1767 - 69）はネットから無断拝借しました。  
No. 1

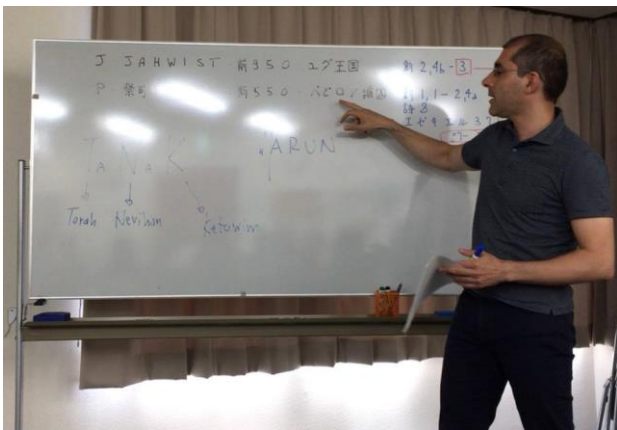




No. 2



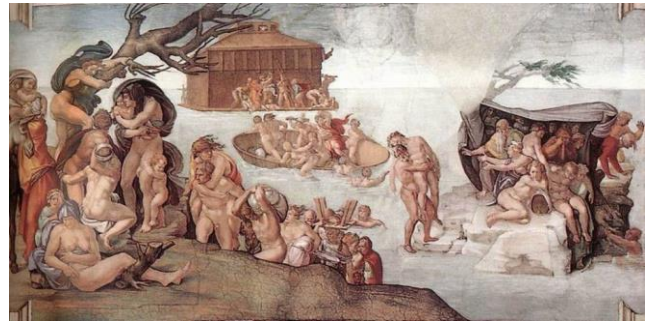
No. 3



No. 4



No. 5



No. 6



2015. 8. 1

今日（8/1）は、船橋学習センター「ガリラヤ」の研修バスツアーで、匝瑳市の須賀ハリストス正教会と飯高壇林を訪ねました。

船橋学習センターでは、昨秋、アンドレア師のイコンに関する講座が開催され、その中でギリシャ正教（オーソドックス）のイコンの伝統的な儀軌と、日本のイコン画家山下りんの作品について勉強しましたが、今回はその作品を直に拝観するフィールドワークで、35名の参加がありました。

須賀ハリストス正教会は、明治23年鵜沢神父によって名主だった鵜沢家の屋敷内に創建、明治32年にニコライ大主教から山下りんのイコン10枚が降福され、千葉県の有形文化財の指定されていますが、公開は年に8回だけ。今回は匝瑳市教育委員会のご配慮で特別に拝観ができました。

以前は日本家屋の古い聖堂でしたが、平成11年に新聖堂に建て替えられました。

教会に着くと、鵜沢神父のお孫さんの鵜沢家のご当主が迎えてくださり、正教会の礼拝の仕方や現在のこの教会の信徒の状況など説明があり、イコンについては現在修復中で、すでに4枚がうつくしい姿を取り戻したとのこと。

続いて、アンドレア師から東方教会の祭壇画（イコノスタシス）の約束事とその神学的な意味について、丁寧な講義がありました。

聖堂の内陣を区切るイコノスタシス（聖障）は、神の世界との接点で、その中央入り口の「王門」には、上部に最後の晩餐、扉に受胎告知の聖母と天使ガブリエル、その下に四福音書記者が、左右の門（ドア）には、大天使ミカエルとガブリエルのイコンと決まっているそうで、この聖堂も小さいながらその儀軌に従っています。

お話をおききしながら、山下りんが描いたイコンを見つめていると、その描き方の筆使いは、儀軌に忠実でありながら自由で、西欧絵画の陰影やと日本的な情緒に満たされ、描かれた主なるキリストと聖母の優しいまなざしが私たちをしっかりと

見つめていることを深く感じました。

1. 須賀ハリストス正教会に着きました。
2. 千葉県と匝瑳市教委の解説板
3. 聖堂内部（撮影不可のため、教会発行の絵葉書から）
4. 山下りんのイコン「聖母子」（千葉県教育委員会HPから）
5. 同「福音書記者」（『山下りん物語』から）
6. 須賀教会のたたずまい＝左に鵜沢家の屋敷門
7. 同＝鵜沢家屋敷門と槇の生け垣、一面に広がる水田

1.



2.





3.



4.



5.



6.



7.

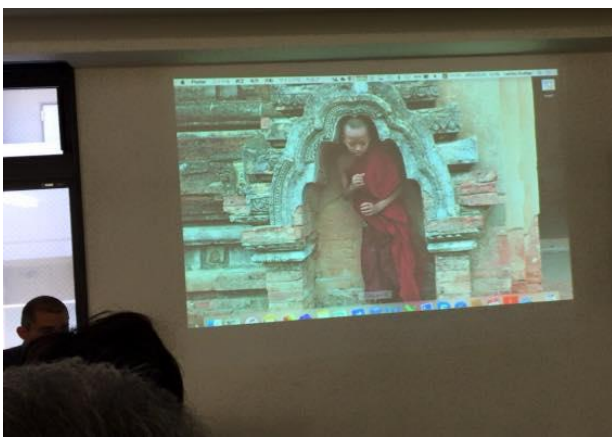




2015. 9. 30

今日 9/30 午前中は、船橋学習センターガリラヤで、この秋再開したアンドレア師の講座を受講しました。この夏ミャンマーでお仕事されてお戻りになったばかりで、ミャンマーの社会情勢などの話を交えての講座でした。

システィーナ礼拝堂に描かれたノアの箱船に続き、次回から出エジプト記がテーマ。現代のシリアなどの難民やミャンマーの軍事政権下の社会状況は、まさに出エジプト記の内容を示唆しているようでした。



2017. 10. 7

今日 (10/7) 午前中は、船橋学習センター ガリラヤでのアンドレア・レンボ師の講座『「神の国の到来」—システィーナ礼拝堂の想像力(7)』を受講しました。

システィーナ礼拝堂の南壁面には旧約のモーセの生涯、北壁面にはキリストの生涯は、南北対応して8枚ずつ描かれています。ボッティチェリなどのルネッサンスの人気画家に、ジョットによって描かれたアッシジの教会の壁画の様式(聖フランシスコとキリストの生涯を両側面に対応して描く)を模倣して描かせた絵で、もとは、それぞれの誕生のシーンが正面にあったが、ミケランジェロが「最後の審判」を描くにあたって、塗りつぶされてしまったとのこと。

今日は、旧約の「出エジプト記」2~3章を朗読して、内容を把握したのち、ボッティチェリが描い



た「モーセの試練」と「イエスの試練」について、詳細に解説いただきました。

前者の絵 (No. 3) は、モーセが強制労働の場でヘブライ人を打つエジプト人を殺し、ミディアンに逃亡、井戸の傍らで祭司の娘たちを助けてその娘を娶ったが、燃える柴の中に神が現れ、エジプトの同胞を強制労働から解放するため、エジプトへ戻ることを命じられるというストーリーを 1 枚の絵の中に描いています。まるで絵巻物のように、橙色に緑色の衣をまとった主人公が、右から 6 場面に繰り返し登場する様式になっています。

この絵に対応する「イエスの試練」(2No. と No. 4) は、サタンの誘惑に抗するイエスの 3 場面を上、下には、イエスに重い皮膚病を癒された若者が、祭司にその回復を告げる場面が描かれています。この絵には左右にたくさんの群衆が描かれていますが、右はシクストゥス 4 世を出したデッラ・ローヴェレ家の人々、左はフィレンツェの実質的な支配者のメディチ家の人々で、当時の世俗的现实を如実に表している、右下の子供がその醜さに目をそむけているのは、画家の本心を暗黙に語っているとのこと。

イタリア観光では、だれもが必ず見学するシステイーナ礼拝堂の壁画ですが、内容を把握しているか、してないかで、その価値は何十倍も違うと感じました。

(No. 3 と No. 4 は、ネット検索でコピーしました。)

2015. 10. 15

昨日 (10/14) 午前中は、船橋学習センター ガリラヤで、先週に引き続き、アンドレア・レンボ師の講座『「神の国の到来」 - システイーナ礼拝堂の想像力(8)』を受講しました。

礼拝堂の北側壁にペルジーノにより描かれたモーセ伝は、「出エジプト記」の 3~4 章の「エジプトへの旅」。(No. 1 No. 7)

舅エトロの元から、エジプトの同胞を案じて帰ることを神に命じられたモーセの旅の途中、試練に遭い、モーセの子に割礼を施すという物語で、上(奥)→左下→右下へと 3 つの場面が展開する構図です。

出エジプト記 3 章には、「イスラエルの民に示す神の名は？」というモーセの問いに、「わたしは『ある』ものである」という神の啓示が出てきますが、この言葉のヘブライ語とギリシャ語での表現について、丁寧な説明がありました。

出エジプト記の時代は、現在のシリアのような状況で、難民移民の群れがモーセのようなリーダーに率いられてさまよいながら新天地をめざしていた中、それぞれの祖先祭祀や自然崇拝がまじりながら、多神教から一神教へと集約されていく過程で、このモーセ 3 章の「神の名の啓示」は、とても大事な一節でした。キリストの絵には、その光輪に、「わたしはある」の意の「I Ho N」の文字が書かれましたが、これは「イコン」と発音され、ルネッサンス以前のキリスト絵画を意味するようになったとのことです。(No. 2 No. 3)

これに対応するイエスの生涯では、「主の洗礼」が描かれています。(No. 4. No. 8)

左上に「悔い改めよ」と説教する洗礼者ヨハネ、右上にそれに答え説教するイエス、そして中央が主の洗礼の場面で、「私の愛する子」という天の声＝神の姿は旧いイコンの形式で表されています。システイーナ礼拝堂天井画のような神の姿 (No. 5) が描かれるのは、ルネッサンス絵画でもミケランジェロになってからで、ペルジーノの頃はまだ難

しい課題だったようです。

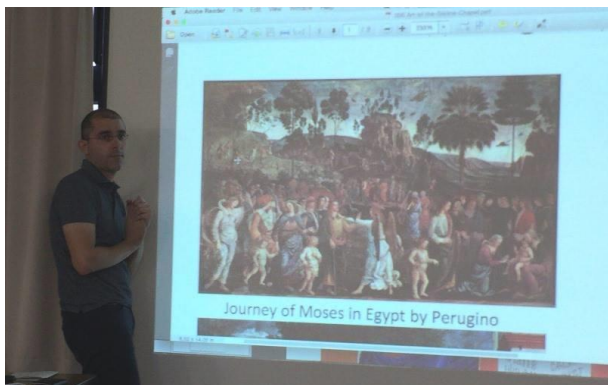
この絵の特徴は、群衆列によるXの構図で、視覚的な遠近法というだけでなく、Xはキリストを意味するため、ミケランジェロのピエタなどキリスト教芸術の技法として多用されるようになりますが、ペルジーノのこの絵はそのはしりであったようです。

また、左右の当時の服装の群衆像は、例によってスポンサーサイドの人々で、左がフィレンツェのメディチ家、右が対立するミラノのスフォルツァ家だそうです。

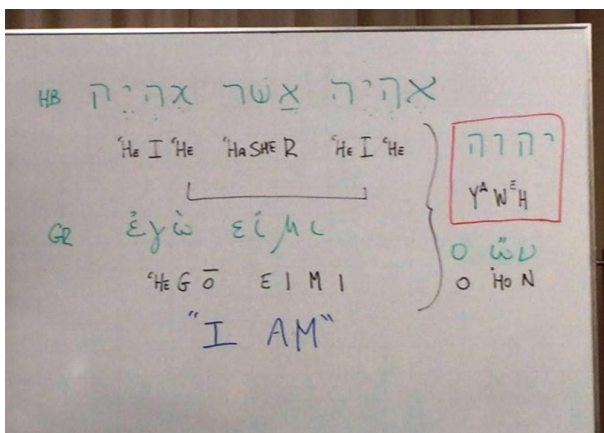
続いて、ギルランダイオの描いた「使徒の改宗」（最初の弟子の召出し）の絵（No. 6 No. 9）、これにモーセ伝の「紅海横断」が対応しますが、詳しくは次回となります。

（No. 7~9 は、ネット検索からのコピペです）

No. 1



No. 2



No. 3



No. 4



No. 5





No. 6



No. 7



No. 8



No. 9

